remoでは、様々な情報や価値を運ぶことのできるメディア「映像」を、21世紀にふさわしい概念で捉えなおし、新たなフィールドを開拓することを目的とした実践的な試みを行う研究会[New Visionaries]を主宰しています。
このマップは、これまで[New Visionaries]の活動の中で出会った様々な事実や動向を元に、関連するトピックをあらためておおよその時系列に配置したものです。ここでは映画、アート、政治、技術、通信などの歴史が見え隠れしつつ、さまざまに相互干渉しあっている様が見えてきます。この図から、現代において映像メディアの担う役割が「娯楽(エンターテインメント)」に留まらず、さらに大きな機能を持っていることを感じ取っていただければと考えています。

シネマトグラフ

1895年、リュミエール兄弟が撮影、映写、ポジの焼き付けという三つの機能を兼ね備えたシネマトグラフを開発。同年12月28日にパリのカフェで有料の試写会を開いたのが映画のはじまりとされている。現在、アメリカのトーマス・エジソンと並び「映画の父」と呼ばれる。1987年には、大阪でも公開されている。

ナラティブ

1902年に、世界で初めて物語構成(ナラティブ narrative)を持った映画『月世界旅行』がフランスで制作される。監督は世界で最初の職業映画作家であるジョルジュ・メリエス。翌年の1903年にアメリカでも、エドウィン・ポーター監督による物語性のある作品『大列車強盗』が制作・公開される。

ビデオアート

美術の歴史にビデオアートと呼ばれる作品が出現したのの1963年。美術家ナムジュン・パイクが、TVモニターを用いた展覧会をドイツで開いたのが始まりとされている。彼はビデオという当時のハイテクノロジーに着目、「テクノロジーと電子環境をどのように人間的なものにするか」を試行するため、映像作品、ビデオインスタレーションなど数々の作品を制作。映像による表現を通して芸術の概念をも拡大し続け、ビデオをアートの形体のひとつとして、その可能性を広げた。現在では映像メディアを用いた多種多様な表現が見受けられる。

エクスパンデッドシネマ

1960年代後半、映画館の規定のスクリーンではなく、複数の映写機で複数のスクリーンに投影するマルチプロジェクションや、スクリーン以外の物体や空間などに投影し、他メディアとのコラボレーションを行うなど、映画の概念を創造的に拡張するムーブメントがあった。
日本では、松本俊夫が『つぶれかかった右目のために』で3台の16mmフィルムプロジェクターを使ったプロジェクションが始めて。1968年。

Creative Commons
(クリエイティブ・コモンズ)

米国の憲法学者Lawrence Lessig教授などが中心になって運営しているプロジェクト。
「クリエイティブ・コモンズでは、知的財産権によるコントロールを意図的に制限し残りの部分を"共有地"に置くことによってあらゆる創造的な活動を支援できると考えています」(荒川靖弘氏によるテキストから)

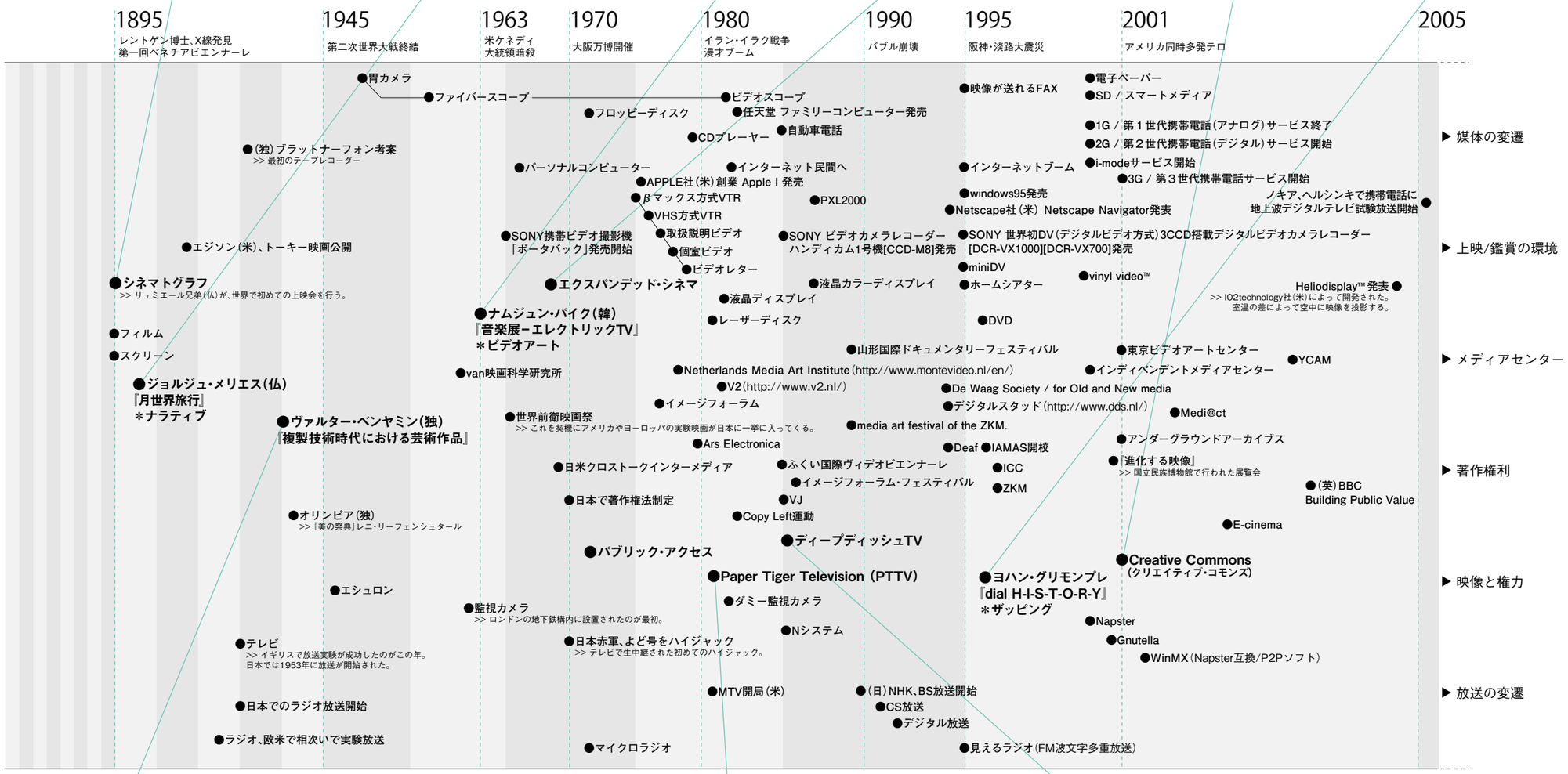
ヨハン・グリモンプレが、『ダイアル ヒ・ス・ト・リ・ー』の中で用いた文法 ～Zapping～

一般的に、リモートコントロールを用いてテレビのコマーシャル中に番組と番組の間を自由に切り替える行為がこう呼ばれている。『ダイアル ヒ・ス・ト・リ・ー』の中で行っている映像のサンプリングを「ザッピング」と呼ぶJohan Grimonprez。彼はこれを「現実の新しい見方である」と捉える。
「それはまさに湾岸戦争で使用されていたテレビの言語に反映していたのです。おむつと政治、ケチャップと高性能ミサイルなど、報道の映像とコマーシャルが交錯した状態でした。もし湾岸戦争の報道をベトナム戦争があった時代に見ることができたとしたら、いかにニュース産業が超現実的 / シュールリアリスティックなショッピングゾーンに変貌しているか一目瞭然でしょう」(粉川哲夫氏との対談より@remo)

『dial H-I-S-T-O-R-Y』

>> ドン・デリーロの小説を基にした架空のストーリーラインをベースに、様々なハイジャックのニュース映像(最初のフライトから今日まで)をzappingすることで、マスメディアというメインストリームの中で語られたストーリー・歴史を再編するとともに、マスメディアの在り方を鋭く批評した映像作品。

原案・監督:ヨハン・グリモンプレ
制作:ジョルジュ・ポンピドゥー・センター
68min / 1997 / ドクメンタX招待作品
ダゲレオ出版よりDVD販売中



[映画とテレビ、以外 ～さまざまな映像表現～]

リュミエール兄弟が動くイメージ「映像」を鑑賞する仕組みを開発して以来、エンターテイメントとしての商業映画が発展していく一方で、フィルムを用いたあらゆる表現に関する実験が繰り広げられ、数々の手法や作品が生み出されるとともに、映画が成熟するプロセスの一旦をも担うこととなりました。その後、テレビやビデオなどの出現により、ビデオアートと呼ばれる作品が生まれているように、アーティストは常に、同じメディア(媒体)を使いながらも、既存のメディアの在り方を検証し、異なった視点でそれの持つ特異性を見い出し、その可能性をあらゆる方向に拡張することで、新たな表現を創造し続けています。今後、さらに増殖していくであろう多種多様な映像表現のアウトプットは、既存の映画館やテレビ、そして美術館のみにとどまることはないでしょう。

[文房具/実用品としての映像]

映像に関連するトピックをこうしておよその時系列に並べてみると、いわゆる「作品」として扱われる映像の流れがあるのと同時に、監視カメラ、胃カメラ(ビデオスコープ)、電化製品などの取扱説明ビデオといった流れも見えてきます。それらは独立した「作品」としてではなく、何かをより詳細に、より確実に知ろうとする時に有効な機能を持った道具として、映像が利用されようとしていることを示しています。つまり過程(プロセス)としての映像の活用です。このような流れが、携帯電話の契約台数(8000万台)のうち64%がカメラ付の機種となった今、人々が身近な道具(文房具や実用品)として更に映像を活用する状況が、近い将来訪れて来るであろうことの予測を容易にしています。また、80年代の半ばからほぼ世界同時的にVJ(Video / Visiual Jokey)と称される人々が活動を開始します。クラブなどで始まったとされるこの動きは、DJが音楽によってその場を演出するようにVJは映像/視覚でその場を演出します。驚くことにこれは、映像をストーリーや何か具体的な情報を運ぶメディアとしてではなく、場を演出する素材のひとつとして広く用いようとする態度の誕生を示しているでしょう。

[パブリック・アクセス]

1972年、比較的早くからケーブルテレビの普及した合衆国において、アメリカ連邦通信委員会により、すべてのケーブルテレビ局に設置を義務付けられた制度。大資本メディアによるテレビの寡占を避けるため、アーティスト、アクティヴィストの抗議活動に応じて制度化されました。地域の住民が使用するための専用チャンネルであり、公共サービスとしてフランチャイズ契約に基づき運営されています。
パブリックアクセスの草分け的存在といわれるペーパータイガーTVは「情報産業の神話を打ち砕く」という標語を掲げ、ディープディッシュTV衛星ネットワークは同様の各地のパブリックアクセス・チャンネルを結び、合衆国全土に中継しています。日本では、熊本ケーブルネットワークが「使えるテレビ」と銘打ち、「住民の住民による住民のためのテレビ」 の実現を目指し番組を制作し、慶応大学湘南藤沢キャンパスの大学生が中心になってはじまった[湘南テレビ]や、インターネットを手始めに北海道におけるパブリック・アクセスの拠点となっている[シビック・メディア]など、全国で様々な動きが始まりつつあります。同時にインターネットが身近な存在となった現在では、この考え方を推し進めた新たなパブリック・アクセス手段、デジタル・スタッド(デジタル都市の意)という発想も登場しています。94年に生まれたインターネット上の都市コミュニティーであるデジタルスタッドというこの発想は、誰もが自由にメディアを持ち、表現し、メディアを通じて直接的な社会参加を実現できるようにしようという意図を持つものとしています。

ヴァルター・ベンヤミン
『複製技術時代における芸術作品』(1936)

『ベンヤミン・コレクション1:近代の意味』所収
ちくま学芸文庫 1995年 浅井健次郎 編訳、久保哲司 訳

「ベンヤミンは、写真や映画のような複製技術の発達が、これまでの芸術概念の中心をなしていたアウラを消滅させ、新しい価値観をもった芸術が登場することを予言的に論じた。同時に彼は、写真や映画が視覚的無意識を発見させるように、新しいメディアこそが、かつての芸術や表現にそなわっていたアウラを逆に見えるようにする、というするどい指摘を行っている。アウラは集団的かつ複製的な表現、受け手が送り手になるようなメディアの可能性によって消失し、その喪失によってむしろ存在を明確にさせたという逆説がここにはある。この逆説を通して、ベンヤミンは新しいメディアのなかに、集団的な知覚の革命のトレーニングとなるような政治的な契機を見い出したのである。わたしたちが依然として、このテクノロジーとメディアの逆説のなかにあることは言うまでもない」(『カルチュラル・スタディーズ』上野俊哉/毛利嘉孝)
つまり、まさしく私たちは今、ベンヤミンの予見の真っ直中にいる。それは、混乱とチャンスの入り混ざった時代であり、すぐ手を伸ばせばそれぞれの知覚のサイズに見合った機会を見つけることができ、それを洗練させていくこともできる。あるいは、ただただ溺れることもできるのである。

Paper Tiger Television (PTTV) / PaperTiger.org

1981年に設立された、開かれた・非営利な・有志(ボランティア)のビデオ制作者集団。設立以来各地のパブリックアクセスチャンネルに番組を提供。「情報産業の神話を打ち砕く(Smashing the Myths of the Information Industry!)」という標語は、共同創設者のDee Dee Halleck氏のヴィジョンであり、様々な映像技術の大衆化を道具に、情報発信を企業メディアのみに依存する状況を打破しようとするもの。
「メディアの企業構造にメスを入れ、その中身の批判的分析により、情報産業の神秘のヴェールを剥ぎ、コミュニケーション産業への批判的精神を養うことで、情報資源の民主的管理を行うための突破口となる」(第三回日本ビデオ・テレビジョン・フェスティバル・カタログより)

DeepDishTV.org / Deep Dish T.V. network - the first national grassroots satellite network

ディープディッシュTVは、1986年に設立された合衆国初の草の根衛星ネットワークで、ローカルなパブリックアクセス番組制作者や独立ビデオ制作者、アクティヴィスト、そしてプログレッシヴなテレビネットワークの理念と実践をサポートしてくれる諸個人を繋いでいる。商業ネットワーク局がみな似たり寄ったりの一面的な社会の見方を提示するのに対して、ディープディッシュは多様性をもって成長する。テレビが受動性を促すのに対して、ディープディッシュは教育的で創造的な番組を配信して活性化する。ディープディッシュの番組は合衆国各地の200以上のケーブル局の他、いくつかの公共テレビ局でも放映され、多くの人が衛星から受信している。教師やコミュニティグループによって、グループ上映会や議論のためにも利用されてきた。

■参考文献

アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス
平沢剛編 / 河出書房新社 / 2001年発行

現代思想2001vol.29-15
11月号臨時増刊『現代思想を読む230冊』
青土社 / 2001年11月25日発行

映像表現の創造特性と可能性
情報デザインシリーズ4
編者:京都造形芸術大学 角川書店 / 2000年発行

増補 情報の歴史
監修:松岡正剛 / NTT出版株式会社 / 1996年初版発行

映像と社会
田畑暁夫著 / (株)北樹出版 / 2003年7月5日初版発行

メディアの技術史
雲藤義博著 / 東京電気大学出版局
1999年6月20日発行

アート・ミーツ・メディア:知覚の冒険
企画:ICC / NTT出版株式会社 / 2005年発行

■インターネットからの参考文献

ascii24
http://ascii24.com

remo
record, expression and medium - organization.
remo / NPO法人 記録と表現とメディアのための組織
2005.10